

雪の中のくらし

松浦 俊博

二月初めに「雪まつり」見物を兼ねて、孫の小学校入学説明会に出席するため札幌に行った。新千歳空港は札幌付近で最も積雪の少ない場所らしいが、毎日夜中に何台もの除雪車を走らせて滑走路の雪かきをしている。駐機中の飛行機の翼などの除雪も頻繁に行っていた。また、札幌市は道路に積みあがった雪の山を一〇〇〇台の除雪車とトラックを動員して近隣の山に運んだ。

札幌では毎年十一月終わりには根雪が地面を覆い雪との共存というか戦いが始まる。主要道路は歩道も含めて比較的頻繁に除雪されるが、凍った雪面になるのでツルツと滑り、歩くのは怖い。ドサンコたちが滑りながらもすいすい歩いていくのに対し、よそ者は緊張しっぱなしのペンギン歩きで本当に疲れる。小道は積もったままの場所が多く、歩道と車道の境も分からず、振り向けば車が音もなく後ろにいることもある。家の雪かきをすると、歩道と車道の間にも達する雪の壁ができて見通しが悪い。

こんな雪の中で、孫は外出時には雪靴の上に靴の中に雪が入らないようにカバーを付けて歩く。遠くまで行くときには、ロープ付きスノーボードに乗って親に引っ張ってもらう。最近では、父親が近くの公園に連れていき、貸スキー一式を300円で借りてスキーの手ほどきを始めた。彼は南チロル出身でスキーが生活の一部だったから、孫もすぐに慣れるだろう。

外から帰ると、父親はピザを作ってくれる。前日から準備していた鏡餅のような形の生地八個を一つずつ手で広げて円盤のような形を作り、ピザソースを塗りトッピングしてオーブンで焼く。彼の母はミラノのレストランで働いたことがある料理は得意だった。そのせいか、彼もなかなか料理がうまい。最近専用のオーブンを買ったのでピザがメニューに加わった。

直径30cmくらいある大きいピザだが、孫は一枚全部たいらげる。しかも手打ちぎって口に押し込み、頬っぺたまでソースでべたべた。マナーを教えるのは小学校に入ってからだろうか。

